

は根本的に異なる概念のもとでとらえられるべき社会現象となりつつある。人々の移動に伴う社会・文化的側面の違いはますます小さくなっているのである。生活面で、中国の大都市と日本の都市との間にどれほどの違いがあるだろうか。言葉や生活習慣において、グローバル・レベルの普遍化が進んでいる。その一方で、人々は旧来のつながりと新しいつながりをいずれも継続して保ちながら、移住先の社会で暮らすことが可能となっている。これは逆もまた同様であり、帰国あるいは母国への再移住においても移住先であった社会との関係は継続的なのである。

移動は容易であり、時間的・空間的距離の縮減は情報・メディア分野に留まらず社会全体の様相として進んでいる。中国系移住者が共有する社会空間は、東京の郊外居住地における狭いエスニック・コミュニティに留まっただけではない。むしろ、空間的な制約を超えて、社会的ネットワークは世界大に広がっていると考えられるのである。こうした広がりの中に日本の郊外住宅の現実がある。中国系移住者をとりまく社会環境とエスニック・コミュニティの様相はマクロな社会環境の変容に規定されながらも、引き続き地域社会に色濃く影響を残していく。

ここでの調査から読み取れることは、中国系移住者世界が階層分化を遂げはじめており、中国系移住者の増加がそのまま問題だけを生み出しているわけではないということである。彼らが日本社会への貢献、経済、社会、文化面での多様性をもたらす新しい社会力の一つを構成していることも注目していくことが必要と考えられよう。

Ⅲ. 郊外居住者のケース

<ケース1> Zさん、1959年生まれ、45歳。北京の理系大学出身。原子物理学を勉強したかったが、希望は叶えられず、自動制御を学んだ。滞日12年、永住権を取得済みで、自宅の購入を考えている（A市在住7年）。

調査実施時期：2004年9月、インタビューは団地の集会所で行った。

1. 滞日歴

1987年国家プロジェクトの一貫で、研修生として1年間日本に滞在経験がある。そのときは池袋の近くのホテル・サンルートに宿泊していた。その後妻が1991年に東北大学に留学生としてやってくる。私は1992年に妻より1年後れてやってきた。子供がその当時4歳だった（現在は16歳、高校2年生の女子でT大学付属高校へ通っている）。

最初の半年間日本語学校、その後研究生そして、生態情報に関する勉強のため、東北大学の大学院へ進学。1997年修士号取得。妻は同じ時に農学博士号を取得し、一緒に上京する。上京当時、友人の紹介があつて、直接この団地に入居。その当時は申し込みば入

れる状態だった。すでに、中国人が暮らしている基盤があった。

現在、S交友会なるものは自分の認識では存在していないが、スポーツクラブとして活動があって、週1回、バドミントンや卓球をやっている。それほど固定的なメンバーばかりでやっているわけではないし、日本人も参加している。時にはスポーツ終了後、一緒に話をしたり、お茶を飲んだりする時間もある。

現在は、妻が作った会社に去年から勤めている。それまでは中国人が作ったIT関連企業の中堅企業M社に勤めていた。一時期は40名ほどを抱える企業だったが去年倒産した。今年は中国IBMや中国のソフト開発企業がBridge SEとしての人材を求めて、日本で求人活動をしている。私自身が応募したわけではないので、詳細は不明だが、そうした求人者の動向もあって、ここに住んでいたIT関連企業に勤める友人の何人かが最近帰国した。ここは帰国者もいれば、入居者もいる出入りの比較的多いところだ。

入居した当時、自治会から参加の呼びかけがあったのだが、必要があるとは思えなかった。入会しなかった。その後も特に必要性を感じない。お祭りには参加するというよりも遠くからみている程度だ。

ここに7年住んで、そろそろ一戸建てかマンションを購入したいと考えている。今年の1月には永住権も取得した。ローンを組むのはまったく問題ない。すでに上海の虹口区には160平米（1平米1万円くらい）のマンションを購入済み。上海の水産大学で妻が仕事を持っていて、そことの関係からも上海に住まいが必要と考えた。妻は上海出身で、私は北京出身。どちらに住んでも構わないと思っている。

友人の中には戸田や埼京線沿線にマンションを買って出て行く人もいる。私もこのあたりで探してはと思っている。2年前娘が高校に進学する際、いくつか探したが、そのときは買えなかった。次は娘が大学に進学した後だろう。あと2年はここにいる。

娘は中学3年の前半の半年間を中国北京の祖父母の元で過ごした。その時は一人で北京の学校に通わせた。中国の高校に進学することも念頭にあったのだが、やはり勉強が追いつかないとあきらめた。帰国後、日本の高校に進学するのはまったく問題がなかった。

2. 居住歴

妻の会社は製薬会社などとの共同研究、共同開発を手掛けていて、その関係から内神田に事務所を構えている。水産関係、バイオテクノロジーといった分野の共同開発を橋渡しする役目で、上海の水産大学との関係もこの点を中心としている。

3. 近隣関係

特にトラブルも問題も抱えてはいない。多少のやりとりはあるが、基本的には関係がない。免許を去年取得して、ホンダのオデッセイを購入。駐車場は団地内にあり、経費は毎月1万4千円くらい。家賃はそれほど安くない。月9万円でこれは分譲マンションを購入

した場合のローン支払い分くらい。ここは敷金が3ヶ月で、礼金はない。

中国人同士のつながりはもちろんある。スポーツクラブの関係が一番頻繁。年に1回、春節の集まりもある。だが、これくらい。娘も高校生になって、それほど地域との関係がない。

子供の教育については小学校の4年生からS小へ通い、中学もそのまま。当時は2、3クラスあったと思う。いろいろな言語ができることはもちろんメリットがあると思うが、小学校の段階で中国語や中国文化を取り入れることに関しては必ずしも必要とは思わない。

4. 日本社会の諸問題

最初から留学生として日本に滞在していて、留学生の数もそれほど多くなかったこともあり、歓迎されていると感じた。また、最近では数が増えてきたが、次第に体制も整ってきているのではないかと感じる。

報道に関しても特に感じることはない。ただし、これまでに2度盗難の経験がある。1度は仙台で自転車を盗まれたこと。もう1度は東京に来てからスーパーで買い物をした品物を自転車に載せたままにして、その場を離れたら、持って行かれてしまった経験がある。1度目は自分の責任と思って、特に警察に届けることはしなかったが、2度目はデパートの警備の人に訴えた。でも、やはり自分の責任でもあると思ってあきらめた。悔しかった。

中国だったら、やはり仕方ないと思って警察に届けたりはしない。ちょっとおかしいと思ったのは自転車に乗っていて、無灯火で走っている時に注意されたこと。それから、1987年に最初に来た時、新宿で職務質問されて、外国人登録証を出すように言われたこと。普通はそんな質問はしないし、わからないはずなのにどうしてだか今でもわからない。

また、私自身は経験がないけれど、ここに引っ越して来た人の家に警官が個別訪問をしたと聞いたことがある。これも中国では考えられない。

5. 将来について

今後のことだが、永住権もとって、家も買うつもりでいるし、日本にいて事業を続けていくことに大きなメリットがあると感じている。なによりも、自然に合わせてやることが大事で、大きな流れに逆らわず、その土地に合わせてながら、自分たちが発展していければ良いと思う。

本来は研究をしたいと思って大学院に入ったのだけれど、それも難しかった。最初は原子物理を勉強したかったし、今でも物理には興味がある。でも大学院で選んだ生態情報という分野もとても良いとは思っている。ただし、教授の専門が睡眠研究だったので、ちょっと違うかなとは思った。ニューロンと人工頭脳の研究などは今でももっとも先端的なものだと思う。45歳になって、自分の事業をやっていることにはとても満足している。

それに日本は安心できる社会だから、特に治安の問題も感じないし、安定していて暮ら

しやすい。妻は仕事の関係で済寧市の日本事務所も担っている。このため、とても忙しい。

＜ケース2＞ 中国系日本人、39歳女性Xさん、滞日14年、日本国籍を取得後、インド人の夫と知り合い結婚、娘が一人。

調査場所：Xさんの友人宅（団地内）

調査時点：2004年10月

1. 生い立ち

蘭州出身で、生まれも育ちも蘭州だが、両親が武漢出身で1950年代に三線建設のために蘭州へ来た。周りはほとんど外地の人ばかりで、この職場だけで30万人が生活しており、言葉はすべて標準語。家では武漢語を話していた。現在の国籍は日本。

D外国語学院日本語科出身。1985年卒業。卒業後国際旅行社に努めていた。5年間勤めて、6年にはならないところで日本へやってきた。来日は1990年11月。すでに日本へ来て14年近い年月がたった。この間、ずっと日本で生活している。

知り合いの先生がS大学大学院にいたので、そこで研究生となる。東洋美術の勉強をした。先生はH先生。研究生の後1年間休学してバイト。3年目にマスターに入り、ドクターを修了して就職した。仕事はずっとN新聞のカルチャーセンターで通訳翻訳、旅行添乗などの仕事。この社長とは蘭州国際旅行社にいた当時、シルクロード旅行で知り合った。そのまま、日本へ来てからずっとここで現在まで働いている。

日本へ来たのは日本へ行ってみたいという気持ちがずっとあって、学位がとればもちろん良いと思っていたが、何よりも、旅行社では偉い人にしか日本へ行くチャンスが与えられず、それが不満だった。日本に家族はいなかったが、友人はいた。D外語のクラスメートは1986年、87年頃からすでに日本へ来る人がいた。だから、日本へ来るには旅行の添乗の仕事の知り合った日本人のお客さん、仕事関係の人あるいはクラスメートからいろいろと話を聞いていた。その当時はメールはなくて、電話か手紙のやりとりだった。

2. 居住環境

現在はA市の団地住まい。最初は目黒に住んで、それから中野区本町、坂上に引っ越し、結婚してから、S大のクラスメートの紹介でここへやってきた。彼は自分で探したのか、友人を介したのかよくわからない。ただし、東京では狭い家しか借りられなかったので、ここは東京に比べると安い。選んだ理由は勤務先（日本橋）へ行くのに便利だし、買い物も便利だし、中国人が多い。家賃が相対的に安いなど。友人の紹介はとても重要だった。緑も多いし、児童公園もすぐ近くにある。

近隣の日本人とのつきあいは挨拶程度。保育園は裏の交番の隣にあって、A市立。特に

気をつけているのは近所づきあい。お母さん同士での立ち話や話し合いなどは大事だ。情報交換の意味もある。保育園に入る前に公民館の親子広場に参加していた。ここでは毎週火曜日と金曜日に集まりがあって、いろいろな情報を教えてもらっていた。今自転車は持っているが、車はまだ持っていない。

自治会には参加している。日本籍だし、日本の社会にいるのだから、日本人とつきあうことを心がけている。考え方は同じ空間にいてもわからないことがあるので、できるだけ積極的につきあう。帰化したのは2000年の夏で、添乗の仕事の時にとっても不便だったからだ。海外へ行く機会が多いのだが、日本人だったら問題ないが、中国籍であるために、インドに添乗で出かけるのが大変だった。ビザ、パスポートなど書類の準備と審査に3ヶ月かかった。もちろん、中国に添乗で出かけるときも日本人旅行者はグループビザで何ら問題がないのに、私だけが中国人で入国に手間取ったりして、お客さんに迷惑をかけることが多かった。それだけに、仕事の都合を考えれば日本籍をとることは自然な成り行きともいえる。

ただし、父が生きていたら絶対反対されただろう。武漢出身で、戦争中に徴用で荷物運びをさせられた経験があると昔、話していた。高校生くらいだったが、大変つらい思い出らしく、その仕事の途中で逃げ出したということだった。だから、私が日本人になると言えば、絶対に賛成はしなかったと思う。その父は1998年になくなって、母は特に意見を言わなかった。名前を変えなければならなかったのはちょっと残念だった。Yという姓は母の姓をもらった。名前は自分の名前の字が戸籍に使える漢字になかったので、変えてしまった。ただし、仕事上は中国名ですごしている。その方がしっくりするし、周りの人も便利。インドへ行ったのは技術関係の仕事だったが、そのとき受け入れ側でいろいろやってくれたのが、夫。かれは日本語を勉強してやはりインドの旅行会社で働いていた。

この地域に引っ越して私は経験がないが、夫が家で仕事をしている時に警察がやってきましたと話していた。そのときは不法の人がいるので調べに来たのではないかと思った。うちはまったく問題がなかったので、特に気にはしなかったが、彼らも仕事だし、当たり前のことで仕方ないと感じた。

3. 家族構成と子育て環境

家族は3人だが、弟と一緒に暮らしている。夫は家で貿易の仕事をしている。国籍はもちろんインドで、宗教はヒンズー教徒。母語はヒンディ語だが、いつもは英語と日本語を話している。夫自身はマスターを出ていて、お父さんは公務員で、なかなか豊かな生活をしている。長女は2歳で保育園に通っていて、日本籍。子どもを生んだのは中国だが、そのとき夫が戸籍の登録をするのに自分の家の名をつけられないと知ってとてもショックを受けていた。日本の戸籍ではカタカナの姓を受け付けない。だから、娘の名前はY・S・Sというのだが、戸籍上の姓はYで私の名前をとって、名前の方に主人のファミリーネー

ムであるSをつけた。弟は現在36歳でコンピュータの会社に勤務している。中国籍で独身。日本人と結婚した家族はいない。うちの家族は多国籍家族。

家では日本語が共通言語で、娘にとっての母語も日本語だと思う。もちろん、中国語でも英語でも話しかけており、3カ国語をきちんと聞き分けている。でもやはり保育園にいる時間が一番長いから日本語が彼女にとっての母語といえるだろう。それに、子どもチャレンジのプチ・シアターの虎の縞次郎の話が大好きで、良く見ている。歌も、お話もすっかり覚えている。

子どもが病気の時は夫が家にいるので、夫がみるが、どうしてもだめならば会社を休む。ただし身近に面倒をみてくれる友人はたくさんいる。それに、この団地を紹介してくれたS大の時の同級生が以前はここに住んでいて、上海人で、社会学専攻だったが、とても近い。マスターをとって、その後ドクターはJ大へ移って、現在はあまり社会学と関係のない仕事をしている。

4. 子供の将来

子どもの将来については、日本語をきちんと身につけてほしいので、小学校段階は日本の学校に行かせるつもりだが、中学以上は英語を覚えるためにもインターナショナル・スクールへ行かせたい。ただし、夫はインドで教育したいと考えているようだ。ニューデリーにマンションがあって、今は年に2、3回夫が出張で帰った時に利用している。しかし、もったいないし、老後のことを考えればそこで暮らすことも一つの選択肢になっている。

7、8年前のインドで中国人というとても珍しい存在だった。だから、夫は私が初めて日本の旅行団で日本人を連れて添乗員として出かけた時、私のことを日本人だと思っていた。中国人だというと、とてもびっくりして、なぜ中国人が日本人の旅行客を連れてインドに来るのかと不思議がっていた。それは夫が日本人を連れて中国へ行くようなことだ。

インドと中国はこの5、6年とても急速に関係を緊密化していて、インドでは中国語の先生が足りない。中国語を学ぶ人が増えているし、ビジネスの情報が速く伝わるようになっている。今の会社は女性が仕事を続ける上で、出産についてもとても体制が充実している。それで3人も子どもを生んだ人もいるくらい。

心配な点は子供が大きくなると交流やコミュニケーションの場が足りないので、作る必要があると感じる。親は朝から晩まで仕事をしていて、保育園の時は良いけれど、友人づきあいなどの面で難しくなる。若い家庭で子どもをどう教育していくのかはとても判断が難しい。子どもにとっては3つ以上の文化がまざり合った状態だが、そのどれもが中途半端になるのだけは避けたい。子どもには何人と聞かれたら、「日本人」と答えてほしい。日本語をしっかり身につけることが大事。私にとっても、夫にとっても日本語は外国語なので、夫には日本語を教える必要はないと言っている。英語か、ヒンディ語を教えてくださいれば十分。

5. 社会的ネットワーク

この地域には中国人の友人が20人くらいいる。もちろん本当に親しい友人は4、5人。S大のクラスメートは近くのマンションに住んでいてまるで兄弟のよう。もちろん、中国籍。日本籍になった友人も多い。大学院で留学生同士はとても仲が良かったし、私は日本語ができるので、何か行事などがあれば全員への連絡はすべて私を通じて知らせていた。リーダー的な存在だった。

この地域には自治法によれば350世帯ほどの中国人が住んでいる。もっと多いかもしれない。自治会の活動や意義はちょっと疑問。やめたいと思うこともあるが、、、。居住者は多国籍化傾向にある。インド、ルーマニア、パキスタンの人が増えている。

私自身は夫が私のことを日本人と見ていて、日本的になっていると自分でも感じる。中国人がなぜ日本人を連れてインドに来るのか、私自身は夫に100%メイド・イン・チャイナだと話した。どうやっても、日本人とは違うところがあって、やはり中国人だと思う。日本人の中において中国人だと思ったのはお茶くみの時。これはいまでも慣れないし、不平等だと思う。中国セクションの人たちは中国人以上に中国的なのだが、いまは「はいはい」と言ってやっている。上司との関係でも自分が日本人じゃないと感じることはいろいろある。でも、いまは言わない。昔は言って随分損をした。同じ国の中国人と一緒にいるときは自分は武漢人を両親にもつ蘭州出身の中国人だと思う。ただし、蘭州人という意識はほとんどないし、蘭州語もできない。

日本人の友人はたくさんいる。先生もそうだし、職場は日本人ばかり。同級生で親しい友人が2人はいるし、趣味のサークルで千葉にあるSというグループのさまざまな活動に参加している。地域イベントなどもしかけていて、いろいろなことをやるサークル。そのほか、保育園の保護者や、中国で出会ったたくさんのお客さんとしての日本人たち。中国にいろいろな思いをもっている人がかつては多かった。

6. 文化的な違いへの対応

これまでに民族上のトラブルの経験はないが、家での食事はヒンズー教が牛肉を食べないという戒律を持っているので、その点は子どもにも守らせている。保育園の先生にもお願いして、給食の肉について注意してもらっている。保育園ではほとんど問題ない。BSE騒ぎ以来、牛肉を給食には使わなくなっている。豚肉も食べなかったのだが、結婚以後は主人はゆるやかなヒンズー教徒なので、豚肉を食べるようになった。鶏肉は問題ない。

7. 仕事について

今の仕事は来日以来ずっとやっていて、月曜から金曜日まで9時～5時で働いている。保育園の行事などがあれば代わってもらえるし、妊娠して以後は添乗をしていない。旅行

手配やアレンジなので、デスクワーク。社員は4人で3人は日本人。日経カルチャーの関連会社だが今は独立している。会社の仕事としては、中国の公的機関の代表団の受け入れなどもやっている。観光客についてはあまり扱っていない。この仕事は蘭州国際旅行社以来のつながりでやっている仕事。在留についても、日本籍を取得したので、今は関係ない。かつては留学から国際業務ビザで1年更新だった。特に他のビザへの変更をせずに日本籍の取得をしたが、問題はなかった。

日常生活での一番の楽しみは子育て。子どもが言葉を覚え始めたところで、遊びや言葉の面でとても吸収力があって、毎日の変化がめざましい。

8. 経済面

生活は25万から30万円くらいあれば十分と思っている。現状は二人の収入で十分暮らしていける。家族への送金もしていて、年に1回おまつりの時、正月や春節に送金する。蘭州で暮らしている母には兄弟4人でそれぞれ日本にいる私と弟が月5千円、蘭州にいる姉と弟2人が100元ずつを貯金している。母が病気などした時に使うためのお金を用意している。

生活が安定したと思ったのは96年頃、就職した時。精神的には結婚した時に安定したと感じた。仕事の関係で帰化したこともあって、今後も日本に住み続けたいと考えている。中国のパスポートは不便だし、中国に行けば海外に住んでいる中国人としていろいろな不便を感じなければならない。日本では外国人、中国にも居場所がない。どちらにも自分の居場所がない。税金を払っているのだし、権利も伴う形で滞在したいと考えて国籍を取得した。ただし、老後は家のあるインドで暮らすことになるかもしれない。老後のことを考えると不安になる。会社の年金は国民年金で、貯蓄をしているが、インドに資産としての自宅を所有していることもあって、インドでの生活を考えないわけではない。

9. 犯罪被害の経験について

犯罪被害の経験はないが、逆に忘れ物を届けてもらった経験がある。袋に入れたカメラを電車の網棚に忘れて降りてしまった。すぐに気がついて、探してもらったら、みつかった。でも友人の中には会社に置いておいたパスポートと現金をとられた人もいる。池袋でビルを持っているほど成功した中国人の友人。彼も今は日本に帰化している。被害に合わないための努力をしている。治安が悪くなっていることは確かで、自分の身は自分で守ることが必要と考えている。自転車にバックをのせる時は必ず持ち手のところをハンドルにかけて、すぐにはとられないようにするのは中国の習慣だ。日本は平和ぼけと思えるところがあって、防犯に対する意識が低いと感じる。

生活面の情報は地域の日本人の知り合いや、自治体の広報などを読んでいる。休日診療の医療機関などが出ているし、子どもの急な病気の時など日本人の知り合いは頼りになる。

会社の同僚も子育て経験のある人たちなので、いろいろと教えてもらっている。

日本社会は犯罪の脅威から安全だとは思わない。その意味で、日本人は警戒心が足りないと感じる。ただし、母国に比べれば日本社会は安全だし、日本の警察は信頼できると感じている。

10. 日本社会へ貢献できること

老人が寂しいと思う。楽しいことをしてあげたい。中国の老人たちは朝から公園で太極拳をして、昼は麻雀、夜はダンスパーティと毎日を楽しんでいる。日本はこうした楽しみがほとんどない。

11. 一番関心をもっていること

サッカー問題で中国と日本の若者のギャップがみえてきた。国の教育が影響している。戦争のことを若い人に教えていない。逆に中国の若者は遣唐使、遣隋使のことを知らない。近く感じるようできて、情報交流、コミュニケーションに関していえば希薄。海外に行くことは大事だが、それ以前に知っておくべき事柄があると感じる。かつての旅行者は比較的限られていたこともあって、中国のことをとてもよく知っている人たちだった。現在は何も知らずに中国へ行く。若い人たちには知るべきことを知ってから中国へ行ってほしい。長い歴史の交流の中には戦争の事実もある。祖父母の体験を生で声で聞いている中国の若者たちと日本の若者では感じ方も違う。報道ニュースは表現があいまいで、なぜ化学兵器や爆弾が何万発も中国に残されているのかといった問題について、きちんと伝えていない。知っておくべきことがあるし、そのことを知っていてほしいと感じる。

12. 人生にとって日本での生活の意味

日本語を習おうとは当初思っていなかった。大学受験の時には英語を学ぶことが希望だった。ところがD外国語学院で甘肅省から2名をとることになって、先生がわざわざ面接にやってきてくれた。母の職場に連絡があって、父と面接に出かけて、そこで学校の紹介だし、良いところですよと言われて、D市に行くことを決めた。でも日本語は難しく、あいうえおをいくら勉強しても覚えられないし、文法もわからない。その上、3年になったら近代文学で森鷗外をやって、ますますわからなくなって、やめようと思っていた。でも、その後国際旅行社に勤めて多くの日本人と接触したり、中国にたくさんの日系企業が進出してきて、交流が盛んになってきて、理解しさえすれば交流もしやすいと思った。経験からみると日本人の生活の中で、実際に生活するようになって、日本人のものの考え方も理解できるようになって、気持ちがわかるようになってきた。年配の人たちの中には戦争のことを申し訳ないと思っている人たちもいて、若い人たちが何も理解していないことをとても心配している。大学卒業後、仕事をして日本と関わってきたのはとても良かったと

今では思っている。日本人の心がわかるようになって、習慣を知らない人々と考えがずれたりする時、間に立って仲をとりもつことができらうれしいし、日本で生活してきたことは意味があると思うようになった。

<引用文献>

- 奥田道大・田嶋淳子編著, 1991『池袋のアジア系外国人—社会学的実態報告—』めこん。
- 奥田道大・田嶋淳子編著, 1995『新版・池袋のアジア系外国人』明石書店。
- (財)社会安全研究財団, 1994『調査報告書 外国人にみる犯罪からの安全・安心確保努力の実態把握と被害者化防止を目的とする企業支援活動の方策の検討』。
- 田嶋淳子, 2003「トランスナショナル・ソーシャル・スペースの思想—中国系移住者の移動と定着のプロセスを中心に—」渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編著『都市的世界/コミュニティ/エスニシティ』明石書店。
- 田嶋淳子, 2004「中国系移住者の新しい社会空間形成に関する—考察—北京・上海・福建調査結果から—」『淑徳大学社会学部研究紀要』第38号、79-94 ページ。